高齢者の生きがいの条件に関する考察 ——島根県松江市淞北台団地の事例をもとに——

章 鬼*

A Study on the Condition of Elderly's IKIGAI
- Based on a case study of SHOHOKUDAI Housing complex -

ZHANG WEI

キーワード：住民力、生きがい、高齢者、いきいき交流サロン、淞北台

1. はじめに

日本では高齢化が急速に進行しており、2023年10月現在、高齢化率は29.1%になっている（内閣府 2023）。こうした中、特に問題になっているのは、高度経済成長期の1970年代に各地の住宅供給公社により開発された勤労者向けの住宅団地における住民の一斉高齢化である。これらの団地では、開発当時、30代で一斉入居した勤労者住民が現在80代前半になっている。そして、団地では特に高齢者住民の孤立防止など、地域課題の解決をどう進めていくべきかが問題になっている。

もともと地域コミュニティのない新興の住宅団地に、プライベートな家庭生活を追求するサラリーマン世帯が転入したため、地域のつながりや交流が発展しにくかったが、そこへ高齢化の進行が孤独死、引きこもりなど、高齢者の孤立問題をもたらしている（池田ほか 2017）。

本稿では、1970年代に開発され、同年代

の人々が一斉に入居したことで、高齢化が顕著に進んでいる住宅団地の中でも、様々なコミュニティ活動を行って高齢者をコミュニティにつなぐ場づくりを積極的に行っているとして全国的にも注目されている、島根県松江市の淞北台団地の事例を取り上げる。団地の「いきいき交流サロン」での参与観察調査と、住民を対象とする聞き取り調査の結果をもとに、交流の「場づくり」にとどまらず、淞北台団地における高い「住民力」の実現のためにどのような条件を満たす必要があるかについて考察する。

2. 先行研究

高齢者の孤立防止に向けては、地縁関係の強化が注目されてきた。すなわち、高齢者をコミュニティにつなぎ止めるための、交流の「場づくり」が重視されてきた。

このうち、宮城孝（2022）は、淞北台団地が住民の「住民力」を活かした高齢者住民の交流を実現していることに注目した。宮城に

* 島根大学大学院人間社会科学研究所社会創成専攻修士課程

よれば、「住民力」とは行政を依頼せず、高齢住民ができることを最大化することである。宮城は、浜北台団地でこの「住民力」が実現した理由として、「住民組織である「いきいきライフを推進する会」の発足」、「アクションリサーチの実施」、「住民ができること、支援を求めることの明確さ」という3つの要素を示唆した（宮城 2022：31）。そしてさらに、「住民力」を高めるために「地域の現状を知り、未来を予測する」こと等のポイントを指摘した（宮城 2022：141）。

このように、高齢者住民の孤立防止など、地域課題の解決をどう進めていくべきかについて宮城は、課題解決を行政任せにするのではなく、住民が主体となって取り組むことが最も重要であると考えている。そして、そうした活動ができる地域の能力を「住民力」と呼び、「住民力」が高い模範的ケースとして浜北台団地に注目した。宮城は、浜北台団地の事例分析を通して「住民力」の要素を具体的に示した。

しかし、宮城の研究では、なぜ浜北台団地が高い「住民力」を実現したのかが十分に明らかになっていない。本研究では、浜北台団地での参与観察とインタビュー調査を通して、この点を明らかにしたい。さらに、「住民力」は、個々の住民の主体的な活動を重視する概念である。そこで、本研究の調査では、住民のそうした主体性を具体的に捉えるために個々の高齢者住民の「生きがい」に注目する。

「生きがい」とは、日本独自の造語であり、辞書の定義から見れば、「生きるに値するだけの価値、生きていることの喜びや幸福感」（大辞林）や、「生きている意義」（日本国語大辞典）などと表現されている。一方、神谷美恵子が著した『生きがいについて』では、

「生きがいということばにはいかにも日本語らしいあいまいさと、それゆえの余韻とふくらみがある」（神谷 1980：14）と表現しており、生きがいという概念は、ただ生きる価値というのでも幸福というのでも表現しきれない、非常に複雑なニュアンスを含んでいることを示している。生きがいは、極めて実存的意味の側面を持ち、人間の本質に迫る一方で、具体的な生活的要素も備えており、それら全体が統合されたものである。

3. 研究方法と調査対象

(1) 研究方法と目的

本稿では、浜北台団地における高い「住民力」を実現した要因について、高齢住民の「生きがい」から考察する。そのために、サロンの参加者たちの許可を得たうえで、2023年6月から2024年10月にかけて、合計10回の浜北台「いきいき交流サロン」にボランティアとして参加し、参与観察調査を行い、さらに7人の参加者を対象とする聞き取り調査を実施した。

(2) 浜北台団地について

浜北台団地は、島根県の県庁所在地である松江市の北部に位置する、県住宅供給公社が勤労者向けに1960年代に開発した、高低差35メートルの高台団地である。開発当初では、分譲戸建住宅337戸と県営住宅264戸、県警住宅28戸、合計629戸が建設された。入居は抽選で決められ、当時30代の勤労者の家族が続々と入居してきた。

2022年現在では、現役世代の県外移住と住民の高齢化で、戸建住宅は310戸に減少し、さらに、県営住宅は74戸まで、大幅に減少した（浜北台いきいきライフを推進する会 2022）。他地域から移住してきた当時の働

き盛りの30代であった住民たちは、現在、75歳以上になっており、浜北台団地に今も居住している。年齢別の人口分布から見れば、団地の人口は、前回の実態調査（2017）の1264人から2022年現在の930人まで減少し、さらに、0~14歳の人口は156人から99人まで、百を割って減少している。同時に、2022年現在では浜北台団地の高齢化率は40.1%であり、全国当時の高齢化率の29%（内閣府 2022）より著しく高くなっている。しかしながら、浜北台団地の要介護認定率は22%であり、全国の18.3%（厚生労働省 2022）よりも低い。このように、高齢化率が顕著に高いにもかかわらず、要介護認定率が低いため、浜北台団地は全国的にも注目されている。先述の宮城孝（2022）は、浜北台団地では住民が主体となる福祉活動が地域の「住民力」の強化が進んでおり、要介護認定率の低下や高齢者の社会的孤立の防止が可能となっていると述べる。そしてこれらが、他地域にとっても参考になるということで、「浜北台モデル」として紹介している。

浜北台団地では2000年に高齢化率が23%になり、そのうち、前期高齢者数が高齢者全体の7割強まで増えた。そのため、浜北台自治会は、将来に後期高齢者数が継続的に増加することにより、様々な社会問題がもたらされることを予見した。事前に対策を立てようと、2000年10月に、自治会の副会長であるG氏をはじめ、住民代表23名による「高齢者福祉施策検討委員会」が発足した。前後8回にわたって徹底的に協議した結果、「いつまでも楽しく元気に老いていこう」という合意に達し、住民ボランティア組織という形で、健康体操とおしゃべりの会など、多様な活動を開催することになった。2001年4月には、自治会の高齢者福祉事業の担い手として、G

氏を会長とする住民組織の「いきいきライフ推進会議」が発足し、2006年4月に、「いきいきライフを推進する会」に改称し、浜北台団地の中心部に設置した「ふれあい交流会館」を拠点として、本格的に高齢者福祉問題を取り組んでいる。

高齢者が主体となり、行政に依存せず地域福祉活動を展開する取り組みである「浜北台モデル」は、住民主体で交流活動を実施し、高齢者の「生きがい」を支えるとともに、社会的孤立や要介護認定率の低下に寄与しているという（宮城 2022）。

(3) インタビュー調査対象

今回のインタビュー調査では、浜北台のいきいき交流サロンに参加している高齢住民7人を対象として実施した。方法は、半構造化インタビューの形式で、対象者の過去のライフストーリーを聞きながら、現在生きがいがあるか、ある場合はどのようなことが生きがいについて尋ねた。インタビュー調査は2024年6月に実施した。対象者の個人情報を守るため、7人の氏名は匿名となっている。調査対象の情報は表1のとおりである。

調査対象の年齢は70代から80代で、浜北台団地が出来上がった直後に入居した人が多い。入居理由としては、自分や家族の転勤により県外から引っ越すケースや、子どものために広い生活環境を作りたいとのことで他所から移住してきたケースなどがあった。

4. いきいき交流サロンの参与観察

2022年11月から2024年9月現在まで、「いきいきライフを推進する会」は高齢者住民の交流の場「いきいきサロン」を主催している。いきいき交流サロンは、毎月最終の日曜日、午後1時半から3時半までの2時間にわたっ

表1 インタビュー調査の対象者のプロフィール, 筆者作成.

氏名	性別	年齢	入居時期	入居理由	元の仕事	現在の活動
A氏	男性	82歳	1979年	県外から転勤のため	会社員	サロン、グランドゴルフ
B氏	男性	84歳	1970年	県外から転勤のため	会社員	サロン、グランドゴルフ、カラオケ
C氏	女性	70代	1979年	広い家に住みたいため	教員	サロン、女性ボランティア、健康体操
D氏	女性	82歳	1970年	夫の転勤のため	主婦	サロン、健康体操
E氏	女性	88歳	1970年	県外から転勤のため	会社員	サロン、グランドゴルフ、健康体操
F氏	女性	78歳	1971年	転勤のため	美容師	サロン、健康体操
G氏	男性	91歳	1968年	家を確保したいため	銀行員	サロン

て、浜北台団地の真ん中に位置するふれあい交流館で行われている。高齢者福祉事業の一環として、悪天候を除き、毎月定期的に開催する。現在まで合計15回のサロン活動が開催された。住民たちは自由に参加でき、毎回30名程度の参加者がいる。参加者の年齢は70歳から85歳に集中する。高齢参加者は幼児孫を連れて一緒に参加することもある。交流館の入り口には集金の箱があり、参加費として毎回100円のコインを入れる必要がある。その後、名簿にサインして入場する。

サロンが始まる30分前には、会長のG氏と筆者がおもむろに交流館に到着する。「お疲れ様です」と軽く挨拶を交わすと、すぐに準備に取りかかる。まずはテーブルと椅子を並べ、ビンゴカードやトランプ、俳句カードといった遊び道具をセッティングする。準備が整う頃になると、参加者たちが次々と集まってくる。「元気ですか」「久しぶりだね」と、皆が親しげに声を掛け合う光景はとても和やかである。

午後1時半、G氏が「さあ、始めましょう!」と軽く一言で、最初は地域の出来事や注意事項を共有するコーナーである。「最近、詐欺の電話が多いみたいですよ」「健康診断で血圧が高かった方は、塩分控えめにしてくださいね」など、和やかな雰囲気の中にも大事な情報が散りばめられている。それが終わると、恒例のお楽しみのビンゴゲームである。一人

の司会を選出し、司会さんが番号を読み上げるたびに「ああ、惜しい!」「やった、ビンゴ!」と歓声やため息が飛び交う。ゲームが進むにつれて、場の熱気もどんどん高まっていく。ビンゴが終わると、参加者たちはそれぞれ好きなグループに分かれて活動を楽しんでいる。麻雀卓の周りでは「おっと、ロンだよ!」という声が響き、カラオケコーナーからは昭和のヒット曲が流れている。俳句ゲームでは、真剣な表情で紙にペンを走らせる姿が見られる。午後3時10分、G氏が「そろそろ片付けましょうか」と声を掛ける。参加者たちは、名残惜しそうに道具を片付け、椅子を元の場所に戻す。「また来月ね」「お大事に」といった挨拶が飛び交う中、交流館は次第に静けさを取り戻していく。

このように、「いきいき交流サロン」は、単なる交流の場を超えて、浜北台の高齢住民にとって欠かせない存在である。ここでは、笑い声や親しい会話が絶えず、人と人とのつながりを深める貴重な時間が流れている。そのなかに、G氏という会長が父親のような存在として参加者を見守り、安心感を与えているおかげで成り立っていると言えるだろう。一方、脳トレーニングとしてのビンゴゲーム、交流会としてのおしゃべりなど、後に述べる住民たちの生きがいと一致する。むしろ、そのような取り組みが続けられることで、住民たちの生きがいを活かせることができ、多く

の住民が安心して暮らせる環境が築かれていくことを期待されているようにうかがえた。

5. インタビュー調査

インタビュー調査の対象者は、生きがいについて以下のような話をした。

【健康的に暮らすことが生きがい】

建築系の仕事をしていたA氏は、若い頃、鳥根県のあちこちに転勤し地域とのつながりも少なかった。子どもが生まれた後に、緑の多い浜北台を選び、移住したが、その後も、仕事のため、平日は外出し、休日のみ浜北台に戻る生活を送っていた。そのような生活が60歳まで続いた。退職後は自治体に再就職して、その仕事も72歳で退職した。その後は松江市が主催する高齢者学校に入校し、園芸を学んでいた。現在は、部屋の庭で野菜などの農産物を作りながら、いきいきサロンやグランドゴルフなど、様々な住民活動に積極的に参加している。A氏は、自分の生きがいについて、以下のように述べている。

「いきいきサロンは参加しています。今、私は（いきいきサロンとは別の高齢者のグループである）〇〇会に行って、一応会長をしています。歌を歌ったり、芝居を見たり、そういうことを企画して楽しめました。またこれは来年もやりたいと思いますけども、やっぱり楽しんで健康で長生きに通じるかなと思います。私もその方がいいし、みんなもその方がいいかなと思っています。皆楽しんでくればいいな、自分も声を出して、それが健康に良ければいいなと思いました。」（A氏）

一方、B氏は鳥取県出身であり、会社の事業拡大のため、1960年に松江営業所に転勤してきた。35年間働いたが、体調が悪くなったことが理由で退職した。長期療養を経て、61歳の年金受給条件に達するまで、同じ会社で再就職していた。B氏が浜北台団地に入居したのは、1970年12月であるが、自分の生きがいについては以下のように述べている。

「それから健康で長生きするのはどうしたらいいかということです。それから規則正しい生活というのがまず運動ということで、それから考えながら、会長さんの「みんなが元気に年を取ろう」ということに賛同してサロン活動は欠かさずに出てね。だから、まず頭を使ったり、ゲームをやったり、歌を歌ったり、音楽したり、そういうことで、みんなとよくお話をしたりと、こういうことは頭を活性化して、認知症をなるべく遅らせるとあるのということが、最大の生きがいだと思うのです。」（B氏）

また、夫の転勤により浜北台に引っ越ししてきたD氏は自分の生きがいについて、以下のように述べている。

「今もう友達がおらん。やっぱり子供たちが東京と埼玉に住むことで、寂しいよ。だけど、サロンの体操に行っていることがあって、それが生きがいっていうか、元気でおる。」（D氏）

A氏、B氏とD氏は、退職前はよく知らなかった住民たちと今一緒にいきいき交流サロンや住民活動に参加することで、健康的に生きていることに生きる喜びを感じている。

【他者の役に立つことが生きがい】

松江市出身のC氏は1979年に浜北台団地に引っ越してきた。56歳まで教員の仕事を務めていたが、その後、20年間ぐらい浜北台団地のボランティア活動に参加している。C氏は自分の生きがいについて以下のように述べている。

「女性ボランティアグループでやっていること、サロンでやっていることは、それが、自分を楽しみながら、皆さんにお役に立ちなら、もうそれ以上のことないです。生きがいってうかね、それは、自分たちも楽しみながら、皆さんにお役に立ちたいことです。今、周りの皆さんが楽しんでもらったり、お友達が増えたり、あのサロンで毎日が元気で友達ができて、毎日が元気になる。私はいろんなところでボランティアしていますけども、そういうことに自分が、関わっている。そういう目の前のことを頑張っているとおかしいけどもね。」(C氏)

一方、G氏は銀行に勤めていた時に行員組合の委員長として、新たな退職金制度の設置など、行員代表として銀行とよく交渉していた。その頃からG氏はよく各支店を回って行員たちの意見を聞きながら、管理層と交渉してきた。そのような経験は浜北台団地に入居時にも活かしていた。それは、第一回入居予定の時期の前年に、住宅供給公社から頭金を5割値上げする話があったときである。急遽の値上げは給料が少ない中間層の入居者にとってかなり重い負担であった。入居者たちは頭金値上げに異議を訴え、交渉するための委員会を立ち上げた。そして入居者たちは、行員組合の委員長であったG氏は交渉の経

験を活かせると考えて、G氏を委員会の会員として選出した。交渉の結果、頭金30万円の増額は月賦払いなどで決着した。これによりG氏は浜北台団地入居時にはすでに多くの入居者と顔見知りになっていた。それはその後の高齢者福祉事業で重要な役割を果たしている人物のG氏が浜北台全体のつながりの原点である。その後、浜北台の大湖水問題、高齢化対策などコミュニティの共同課題のなかに、自治会の副会長、および、いきいきライフを推進する会の会長として、G氏は住民たちの団結を呼びかけながら、積極的な対策を取り組んできた。自分の生きがいについて、G氏は以下のように述べている。

「当初集団的に入居の30代が50年余り経過して80代に超高齢化し、足腰の衰えや外出が億劫になって家に引きこもりがちになっています。引きこもればフレイル状態から要介護の引き金になります。今は、いきいき交流サロンという、とにかく楽しく参加できる交流の場を作り試行開催しています。おしゃべり、かるた、ちぎり絵、昔遊び、似顔絵などなど、人生百年時代を楽しく元気に生きてもらうというのが一番の目的です。とにかく楽しく参加できる会場を自分たちで作ってもらうよう期待しています。このいきいきサロンを浜北台の活動の集大成として成功させること、これが実現できれば私は、もう思い残すことはありません。」(G氏)

C氏とG氏のような過去の経験を活かし、福祉事業の運営主役として地域に貢献しながら、生きがいを感じる住民たちは浜北台全体の結束力の構築に対して、中心的な役割を果たしている。

【仲間と一緒にいることが生きがい】

E氏とF氏は退職以降に近隣の住民たちと頻りに交流し始めた。その前には、朝早く出勤し、夕方遅くまで帰るといった単純な生活をしてきた。調査の時に、E氏とF氏は他の対象者より、積極的にインタビューに参加した。その点は印象に残った。E氏は自分の生きがいについて、以下のように述べている。

「私は定年まで勤めて、その頃は朝早く出て、夕方遅くまで、周りにほんの近所しか顔が分からなかったのね。そういう付き合いがなかった。この湊北台の全体的な付き合いだけど、退職してからです。それこそ誰も知り合いがないからです。だけど、だんだんとそういう友達ができ、誘われて、いろんなところに行くようになって、やっぱり、一人で家によるよりも、友達と食事に行ったり、旅行に行ったりすることが今の生きがいです。」(E氏)

一方F氏は友達とおしゃべりは今の生きがいであると述べている。

「昔の子供の同級生のお母さんとかなんかで知り合いがまた帰ってこられたからできて、やっぱりそうしておしゃべりするのが一番楽しみかなと思っています。その後に皆はお茶を飲みながら、お食事して、場所を変えて、お茶飲んで帰ろうかってというのが、まあ、楽しみはおしゃべりです。年取ったせいかな、やっぱり昔が懐かしいからです。」(F氏)

一人でいる状態を回避するために、E氏とF氏はサロンや健康体操に参加する時に、周りの人々と交流しながら元気で生きていることがわかった。

インタビュー調査対象者の生きがいの共通の特徴は、サロンの場で仲間を作ることで、自分一人だけでなく全員で元気な生活を送ることである。

6. 高い「住民力」を実現した要因

(1) 愛他型の生きがいが生み出す住民主体となる課題解決の行動様式

湊北台団地のような新たに出来上がった地域に、コミュニティを新たに構築する。そのことが現在の高齢住民たちの生きがいづくりに重要な影響を与えている。調査からはそのようなことが示唆される。

いきいきサロンを通して高齢住民が新たなコミュニティをつくることができている背景には、団地ができて間もない1970年代に発生した渇水問題により構築された住民たちの互助精神があるのではないだろうか。この互助精神が、仲間の喜びを生きがいとする「愛他型の生きがい」につながっているのではないかと考える。

1973年夏に湊北台は未曾有の大渇水危機に直面した。当時の大干ばつ状態では、高低差35メートルの坂道団地は、一般の上水道の水圧では高いところに住んでいる住宅に給水ができなくなった。同じ団地でも低いところに住む人々は、頂上に住む人々ほど大きな水問題を抱えていないため、水の供給は一時的に不平等になった。その時、施設担当として自治会の副会長であったG氏は、各住宅に駆け回って、皆が納得できる給水の取組を相談した。その後、皆の合意が達成し、自治会は統一の水汲み容器を購入し、皆に配布した。さらに、各住宅の水栓を停止し、道路で設置する共有栓に汲みに行くことと決定した。

このように、団地全体の利益を最大化する

ために、全体の協議を経て一部の住民ではなく、団地の課題を住民全員の合意で解決することが規範となる。そのような共同経験が現在の淞北台団地の互助精神の源泉であると同時に、他者のために何かをしたいという気持ちは、現在の愛他型の生きがいにつながっている。それは住民全員が一致団結して課題を解決する規範が形成された重要な契機となるだろう。

このことは、アメリカの社会学者パットナムが提示したソーシャル・キャピタルという概念でも説明できるだろう。ソーシャル・キャピタルとは人々の協調行動を活発にすることによって社会の効率性を高めることのできる、「信頼」「規範」「ネットワーク」といった社会組織の特徴であると定義される(Putnam 1993)。特に、互酬性の規範は相互依存的な利益交換を意味し、短期的には他者への利益提供という愛他主義に基づき、長期的には全体の効用を高める利己心との調和をもたらす。パットナムは、互酬性の規範と市民の積極参加によって社会的信頼が生じると指摘している。

淞北台団地の事例においては、渴水問題の共同解決を通じて互酬性の規範が構築され、住民間の信頼が深まった。さらに、この信頼が愛他型の生きがいの基盤となり、主体的な活動を重視する「住民力」の実現に向けて、住民たちの主観的な要素を備えている。一方、新たに形成されたコミュニティでは、独立した個人が受動的な立場に陥りやすいため、共同経験のような特定の要因が必要である。この点で、淞北台団地の住民間の結束を生み出した渴水問題の経験は貴重な事例といえる。

(2) G氏の父親的存在と「みんな」の意識

上述のように、淞北台の住民たちは過去の共同経験に基づき、愛他型の生きがいを創出

した。さらに、住民主体の課題解決という規範は「住民力」の実現に住民たちに主観的な要素を提供した。

一方、淞北台団地が開発された当初、入居条件が設置されていた。世帯年収などの経済条件を限定する入居条件では、社会階層の多様性が制限された。その結果、入居者たちは互いに似通ったライフコースを共有し、価値観や生活スタイルにおいて共通点が多い傾向があった。このような同質性は、住民間の共感や信頼感を醸成しやすい土壌を提供したと考えられる。

さらに、いきいき交流サロンの参与観察と聞き取り調査から分かるように入居直後の住宅値上げ問題と後ほどの大渴水といった地域課題が発生した際には、当時の自治体副会長であるG氏は仕事に育てた交渉の経験を活かし、住民たちの団結を呼びかけながら、積極的な対策を取り組んできた。現在、淞北台団地の高齢者福祉事業の中に重要な役割を果たしている人物であるG氏は、住民たちが互いを家族のように捉える。そして、父親のような存在として、住民たちの共同性を強化される。

このように、同質性の高い住民たちはG氏のようなキーパーソンの呼びかけとともに、高齢化を自分のことだけではなく、みんなの課題であるという認識が深くなる。そして、みんなが一体として高齢化に対応するという共通認識も成立する。

そのような「みんな」の意識は、健康に生きることは自分だけではなく、全体の住民のことであるという認識を形成される。これにより、地域全体で「高齢化はみんなの課題である」という共通認識を共有することで、高齢住民たちは孤立することなく、生きがいを持ち続けながら、高い「住民力」を活かし、

高齢化に対して前向きに取り組む姿勢が生まれている。

7. おわりに

本稿では、淞北台団地における高い「住民力」を実現した要因について、高齢者自身の生きがいという主観的な要素から考察した。調査の際には、対象者である淞北台団地の高齢住民は【健康的に暮らすこと】、【他者の役に立つこと】、【仲間と一緒にいること】という3つの生きがいがあることを明らかにした。さらに、淞北台団地のコミュニティ活動に参加している高齢住民では、過去の大渇水などの課題を克服し、その共同経験に基づく愛他型の生きがいを形成した。例えば、A氏やB氏は、地域活動を通じて健康維持や他者との交流を生きがいと感じており、C氏やG氏は地域貢献に生きがいを見出した。そしてそのような愛他型の生きがいでは、住民が主体となる地域課題の共同解決の規範につながっている。そのような住民の間に構築された互酬性の規範が、住民間の信頼が深まった。さらに、この信頼が愛他型の生きがいの基盤となり、主体的な活動を重視する「住民力」の実現に住民たちの主観的な要素を提供した。

一方、入居条件のある淞北台団地では、住民たちには高い同質性を保有する。現在、淞北台団地の高齢者福祉事業の中に重要な役割を果たしている人物であるG氏は父親のような存在として、住民たちが互いを家族のように捉え、住民たちの共同性を強化される。これにより、高齢住民たちは孤立することなく、生きがいを持ち続けながら、高い「住民力」を活かせることができ、高齢化に対して前向きに取り組む姿勢が生まれている。

以上により、淞北台団地における高齢住民が過去の地域課題を解決する際に育てた住民主体的な活動様式が、愛他型の生きがいを形成した。その主観的な生きがいは高い「住民力」の実現に対する不可欠な要素であることを明らかにした。さらに、父親のような存在としてG氏が住民の共同性を強化し、「住民力」である住民の主体的な活動を促している。

しかしながら、本研究の調査対象がサロン活動に積極的に参加している高齢者に限定されているため、孤立が進行している高齢者や、サロン活動に参加できない人々の実態については十分に考察されていない。孤立しやすい高齢者や、外出が困難な人々に対する取り組みや、地域社会とのつながりをどのように構築していくかについても、今後の研究課題とする必要がある。また、淞北台団地という特定のコミュニティに焦点を当てたため、他の地域やコミュニティの事例との比較が行われておらず、普遍的な結論を導くにはさらなる調査が必要である。

付記

本研究の調査は、JSPS 科研費 (23K01749) の研究助成を受けて実施している。

引用文献

- 池田真太郎, 樋口秀, 中出文平, 松川寿也, 2017, 「地方都市における高齢者単独世帯の居住状況と孤独死の実態に関する研究: 新潟県長岡市と新潟市での事例分析」『都市計画報告集』16: 129-134.
- 神谷美恵子, 1980, 『神谷美恵子著作集1 生きがいについて』みすず書房.
- 厚生労働省, 2022, 『厚生労働白書 - 社会保

- 障を支える人材の確保』.
- 宮城孝, 2022, 『住民力 - 超高齢社会を生き抜く地域のチカラ』明石書店.
- 内閣府, 2022, 『令和5年版高齢社会白書』.
- 内閣府, 2023, 『令和6年版高齢社会白書』.
- Putnam R.D., 1993, Making democracy work: civic traditions in modern Italy, Princeton New Jersey: Princeton University press: 163-185.
- 浜北台いきいきライフを推進する会, 2022, 『第5回浜北台高齢者生活実態調査報告書』.